

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19330034

研究課題名 (和文) ミクロネシアにおける日本統治の終焉および戦時からの「復興」

研究課題名 (英文) Liberalization and Rehabilitation of Micronesia from Japanese Colonial Rule -focus on the early US occupation period

研究代表者 今泉 裕美子 (IMAZUMI YUMIKO)

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：30266275

研究代表者の専門分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：ミクロネシア、南洋群島、植民地、南洋移民、委任統治、信託統治、南洋群島、太平洋戦争、脱植民地化

1. 研究計画の概要

米軍の南洋群島侵攻・占領、そして日本の南洋群島統治の終焉から 1950 年代初頭までのミクロネシアを対象に、日米の政策、その下での人々(現地住民、旧南洋群島在住日本人(沖縄出身者、沖縄以外の出身者)、朝鮮人、台湾人、中国大陸出身者、その他)の「復興(rehabilitation)」を、以下 4 点を通じて研究する。

(1) アメリカのミクロネシア占領統治及び信託統治への移行の初期過程をアメリカの東アジア及び太平洋島嶼地域政策との関係において分析。

(2) 日本の植民地支配及び太平洋戦争からのミクロネシアの「復興」をめぐる、日本の南洋群島統治とアメリカ統治の関係性の解明。

(3) ミクロネシア住民のさまざまな分野における「復興」の実態解明、および米軍による占領政策とこれら「復興」との関係。

(4) (1)～(3)を裏付ける南洋群島に対する日本の統治および米軍占領統治に関する史・資料の体系的把握と収集、聴き取り調査の実施。

2. 研究の進捗状況

(1) 米国国立公文書館所蔵の第二次世界大戦期米軍のミクロネシア占領および信託統治への移行過程初期の公文書と、国内で新たに発掘した日本の南洋群島統治終了をめぐる諸政策を示す史料を突き合わせ、相互の関連を分析している。また、南洋群島在住者の帰還方針を通じて、アメリカの東アジア及び太平洋島嶼政策に関する既存の研究を再検討している。

(2) 史・資料調査については、主に国内での公文書、古書点からの貴重史料の購入、国内外での聴き取り調査を実施している。国外調査では、ミクロネシアの人びとと日本人との経験および記憶の共有、戦後の関係について情報収集をしている。また申請者は、日本では南洋群島帰還者の諸組織と 20 年以上にわたり関わってきたことで、この数年漸く聴き取りが可能となった事項も出てきており、精力的に聴き取りを進めている。

海外調査については、平成 19 年度以来、気管支炎および循環器に関する自覚症状の悪化があり、10 時間以上連続する航空機搭乗は見合わせざるをえなくなった。当初計画していた米国本土調査は、健康回復時に実現すべく、米国関係機関とは通信での情報収集、および第二次世界大戦後に発表された欧文資料、研究書を購入し、資料の所在および資料データの整理を実施している。

(3) 方法論の追究と研究交流

本研究テーマについて、関連する先行研究を整理しながら、国際関係研究、地域研究、植民地研究、移民研究、戦争研究の特徴と相互の関係を時代的な推移を踏まえて追究している。その成果は、後述 5 の[その他]○報告など 2、○博物館展示協力 1 を参照。

研究交流では、ミクロネシア、韓国の研究者と随時、情報交換、相手が求める史料の提供を行い交流を進めている。また国内の植民地研究者、移民研究者との研究交流を実施している。

(4) 社会への研究還元

・沖縄県立博物館・美術館開催、「美術家たちの「南洋群島」展」(2008 年 11 月 7 日～2009

年1月18日開催)に沖縄出身者の旧南洋群島での活動、戦時、引揚げ、ミクロネシアの現状に関する専門家として、展示、イベントのワーキンググループに加わった。同展広報活動として、『琉球新報』に展覧会出展者の著作書評、及び、展覧会に関連して旧南洋群島と沖縄出身者との関係についての論考を執筆した。

・アジア太平洋史料センターで、一般市民を対象に、日本とミクロネシア関係の戦時戦後およびそこでの人の移動、について解説した。

3. 現在までの達成度

②概ね順調に進展している。

・本研究の独自性の確認と新史・資料の発掘…3年間を通じて、本テーマは従来研究されていないことが明確となった。その一因には、史料の未発掘があり、研究代表者が20年以上にわたり国内外で発掘してきた史料情報に基づき、外務省、防衛省防衛研究所、国立公文書館で新史料を発掘している。以上の過程から、戦後国内外に分散した旧南洋群島関係史料の相互関係も明らかになりつつある。

・聴き取り調査では、史料に示される諸事実を再検討すべく貴重な情報が寄せられている。インフォマントは高齢化しており、これまでの研究代表者との長い関係のなかで漸くインタビューが可能となる内容も出てきた。また研究代表者が提供する史料に基づき新たな証言も得ている。さらに個人所蔵史料に文書館では接しえない写真、モノ、手記(刊行/未刊行)があり、これらも複写している。

・収集しえた史・資料をもとに、本テーマに関連する旧南洋群島に関する戦争研究、第二次世界大戦中から戦後直後にかけての、東アジア及び太平洋島嶼をめぐる日米関係、引揚げ関係の先行研究を踏まえながら、本年度は本研究テーマのとりまとめ、分析を進めている。

4. 今後の研究の推進方策

本年度は研究とりまとめの年であるため、論文化および学会報告のための準備を進めている。従来、本分野の研究が遅れた一因であった史料は、この間の発掘状況からまだ調査を続ける必要を確認し継続している。聴き取り調査も「3、現在までの達成度」に帰した理由で継続する。

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文] (計2件)

1、今泉裕美子「日本統治下南洋群島をめぐる「地域」認識」中島成久編『シンボルとしての土地—アジア太平洋におけるリージョナリズムとアイデンティティ』(「アジア太平洋におけるリージョナリズムとアイデンティティ」研究会報告書) 査読無、2010年、79-97頁。

2、今泉裕美子「南洋群島への朝鮮人の戦時労働動員—南洋群島経済の戦時化からみる

一側面』『戦争責任研究』査読有、第64号、2009年、50-61頁。

[学会発表] (計1件)

1、今泉裕美子「日本の南洋群島政策と「南洋移民」—1939年代後半を中心に—」日本国際政治学会、2008年10月24日、於つくば国際会議場。

[その他]

○報告など (2件)

1、今泉裕美子「大日本帝国の形成と崩壊における「移民」と「帰還」—旧南洋群島を中心に—」アジア太平洋資料センター、2009年7月28日、於アジア太平洋資料センター。

2、今泉裕美子「矢内原忠雄の「南洋群島」研究」『東京大学教養学部創立60周年記念 矢内原忠雄と教養学部』関連シンポジウム「矢内原忠雄と植民地研究」2009年5月16日、於東京大学駒場Iキャンパス18号館ホール。

○博物館展示協力 (2件)

1、「東京大学教養学部創立60周年記念 矢内原忠雄と教養学部」(2009年3月28日—6月28日開催)の「南洋群島研究」関係展示物の選択、キャプション作成、展示委員会議に参加。

2、沖縄県立博物館・美術館開催「美術家たちの「南洋群島」展」(2008年11月7日—2009年1月18日開催) ワーキンググループに参加。

○新聞・雑誌など (3件)

1、今泉裕美子「矢内原忠雄の遺した課題—戦後日本にとっての「国際関係研究」と「沖縄問題」『UP』5月号、No.439、2009年3月、45-49頁。

2、今泉裕美子「美術家たちの「南洋群島」に寄せて(下)」『琉球新報』(朝刊)2008年11月8日。

3、今泉裕美子「テニアンの子(書評)」『琉球新報』(朝刊)、2008年6月22日。